烏の羽根

Taka多可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳥の羽根

【Ｎコード】
Ｎ４５２３Ｓ

【作者名】
Ｔａｋａ多可

【あらすじ】
人間嫌いな烏（カラス）の悪魔　クロウ　と、
病弱でも脱走が大好きな、入院中の少女　あさな。
小さな神社で出会った一羽と一人。
だがクロウには、あさなの「魂」を回収するという任務が課せられている…
かなわない…かなってはいけない恋。
最後の最期、あさなの望む願いとは…――――
小さな小さな戦い。

天使と悪魔と人間。
現代を舞台に起こった小さなファンタジー小説。スタートです。

かなりライトに書き連ねてます。
どうぞお気軽に。

残酷描写は控えめを心がけています。
書き手自身が苦手なので。

1、暗闇

北の大地にある小さな町…粕河町(かすがちょう)。

海のほうは人間がいっぱいいるやかましい港。
山のほうは人間は少なくて静かで涼しい。

町は、そこそこ。大きな町じゃないけど賑わってる。
小学校から大学。
商店街とかスーパーとか。

仲間とはここらへんで落ち合うことも多かった。

この町に唯一、入院施設のある「かもめ病院」の近くには
神様がいなくなってさびれてしまった小さな神社がある。

鳥や動物がのんびりと過ごし
ときたま人間もやってくる。

オレは　ここで産まれて　育てられて　傷を負って
死んだ。

そして…

新しい姿を得た。

2、黒翼

「ケンゴ！しっかりしろ！！」
「けんちゃん、ママよ、わかる！？」
「ん、う…」

かもめ病院
一番端の病室で６歳くらいの男の子がベッドの上でうなされている。
それを家族みんなで囲っているようだ。

彼は心臓の病気で、血液を上手く全身に行き渡らせることが出来ず
ドナーが見つからない中、人工心臓で命をつないできたが
とうとう限界になったらしい。

小さな身体に、負担が大きかったのだ…

看護士も最善をつくさんと必死で呼びかける。

そんな時

ココンッ

「あ・・クロウ・・く・・・・」
〜よっ！　遊びに来たぜ。〜

いつの間にか窓が開いていて　その窓辺に１４・５歳の少年が立っていた。

黒い髪　　赤い服

そして、窓が開いているのに風は全く吹いていなかった。

「ありがとう…けど、僕、今　動けないよ……」

〜心配要らないぜ。　ほら手、伸ばしてみな。こっちだ…〜

男の子はガタガタと震える手をゆっくりと伸ばしていく

「けんちゃん！　どうしたの？！」

「…ママ、あそこにクロウ君が　いるの……呼ん、で…」

「何言ってるの！？　誰も居な・・・」

ビュゴォオオッ！！！

母親が振り向いたと同時に今まで止まっていた風が、一気に吹き込んできた。

そして、一羽の真っ黒な烏(からす)が紺色の闇へ消えていくのが見えた…

「おぃ！　母さん！！　ケンゴが……！！」

「！　けんちゃん！けんちゃん！！」

「はやく！はやく！！！！」

赤い服の少年は病院の屋上に居た。
しかし、屋上へ上がる階段は夜の間は封鎖されている。

少年の背には黒い、ツヤのある翼が生えている。
左目に大きな傷がある。
そして、右手には　小さく、しかし強い光を放つ石を握っている。

「今回は早かったな。」
振り向くと、白い服（どこぞの魔法使いのようなローブ？）の男が立っている。
背には少年と同じように羽が生えているが、羽毛ではなく昆虫のそれように透き通っている。
盲目なのか　目は閉じられたままだ。
少年の指南役に当たるようだ。

「えぇ、邪魔になる要因が少なかったので…」

少年は光る石を男に投げてよこした。

「…クロウ、お前　その大雑把な性格、どうにかしなさい。」
「ガル＝ベルゼバロ先輩！　オレに説教は『馬の耳に念仏』ですよっ」
「・・・・減点するかな…？」

うっすらと瞼が開いた。
ゾッとするほど恐ろしい、赤い複眼…

「！！！　やっ　そのっ　い、以後、気をつけまッス！」
「…まぁ良いだろう。　次のターゲットだ。今度のは面倒だぞ、注意しなさい。」
「はいっっ！」

ガル＝ベルゼバロ　と呼ばれた男は、少年にカルテを渡し、そのまま消えた。

「ふぃ～…怖かった…　あの人に睨まれるのだけは勘弁してほしいぜ…」

ベルゼバロ先輩は、かの有名な七人の悪魔王が一人
『ハエの王』ベルゼブフの子孫の系統。
普段物静かな分、ちょっとでも怒らせたら…半殺しにされるだろう。

パラパラとカルテをめくる。
「ふーん、ケンゴと同じ病院か…ま、良いか。あいつ以外には姿見せてないから問題ない　と。
…『さびしがり』『脱走癖がある』…なんだコリャ？　うーん、確かに面倒そうだなぁ。」
少年は乱暴にポケットにカルテを突っ込むと翼を広げた。

「悪魔もラクじゃないゼッ！！」

少年は屋上から飛び降りた。
それとほぼ同時に一羽の烏が神社へ向けて飛んでいった。

少年の名は　粕我（かすが）　烏（クロウ）

烏の　漆黒の　翼を持つ

悪魔だ。

3、標的

朝早くの神社。
人気(ひとけ)のない、静かな境内。

赤いTシャツの少年が沢山の鳥に囲まれて立っている。

「いいか、皆。これから全員でこの女の子を捜しに行く。
見つけたらすぐ、オレに知らせてくれ。フォボとディモ、（どちらもカラスだ）
お前達は俺と一緒にここへ残って連絡係だ。皆　頼んだよ。
じゃ、行って！」

バササササササっ！！

少年の合図で鳥達がいっせいに飛び立っていく。
カラス、ハト、スズメ、シジュウカラ、オナガ・・・

カルテを受け取った日から二日目。
オレはターゲットの病院へ何度も飛んでみた。だがすべて空振り。
とっくに脱走した後だった。
時間を置いていってみても、面会時間ギリギリまで戻ってこなかった。

「なんか理由でもあるのかな・・・？」

もう一度カルテを見直してみた。

―小さいころからずっと病院にいる。

―学校へ全く通っていない。

―母親は病院へ見舞いにほとんど来ない。

・・・・・・・・

思いついたのは『寂しさ故か？』　ということくらい。

「母さんに会いたい・・・・・・・とか・・？

参ったな、上手く回収できないかも…場合によっちゃ強奪になるかな…超、面倒くせぇ～…」

・・・とんとん・・・・

誰かが石段を登ってきた。

「！！　（二人とも、離れろ！）」　バササッ

オレもとりあえず座っていたベンチの裏に隠れた。

姿を見せたのは女の子。　青いYシャツにジーンズ。

〜あれ？　もしかして・・・！〜

ほんのり茶色い短髪、毛先がぴんっと跳ねている。

「ふぅ！やっとついたー♪」

音を立てないよう慎重にカルテの写真と見比べる。

間違いなさそうだ　やっと見つけた・・・！

『鶉野　あさな：１３歳、肺に重い病気を患っている。』
女の子は時折　胸に手を押し当てて息を整えている。
どうも危なっかしい・・・
そんなことを考えているうち、案の定　急に咳き込みだし倒れてしまった。

「お・・おい！！」
ほうっておくわけにもいかず、飛び出した。
「大丈夫か！？」
「はぁ…はぁー…　ありがとう、ございます…」
思わずだき抱えてしまってから気がついた。
なにか柔らかい物があたっている。
「んっ・・・ぁの・・・・・」
もぞもぞ動く。顔が赤い。
「！　ごっ　ごめんなさいいいい！！」
確か、『人間の女性の胸部は迂闊に触ってはいけない』って注意されていたんだ…
「ゴメンな・・・うっかり・・・」
「・・・・・」

「あさなちゃん！」
「！！」　「なんだぁ？」

女の子の顔が一瞬曇った。
看護士達が２・３人石段を駆け上がってくる。

「やっぱりここにいた！　もう、逃がさないからなっ　さ、病院へ帰るよ。」
「・・・ハイ・・・・・」

沈んだ顔・・・やっぱり、病院に居たくないんだ…

「きみが見つけてくれたんだね？　ありがとう、ゴメンね…この子、病気で入院してるんだよ。」
「いえ、大丈夫です。それよりオレの方が悪いことしちゃったみたいで…」
「？　そうか…　それじゃ。　ほら、行くよ…」

「あっ　ちょっと待った！」
女の子の肩をつかんだ。

「…なんですか？」

怯えさせてしまったらしい。　顔がこわばっている。

「オレ、クロウ！　粕我　烏（クロウ）っていうんだ。　名前、教えてよ。会いに行くから・・・！」

「・・・・・鶉野・・あさな　　です・・・」
ふっとやさしい顔になった。　うっすら頬がピンク色に染まった。
「いい名前だね。　じゃ、後でね！！」
手を振って分かれた。

石段から人影がなくなったのを確認して
「さて・・・と。」

オレは小さな鈴を鳴らした。ベルゼ先輩からもらったヤツ。
フォボとディモがサッと飛びでてきた。
「皆に連絡してきて。もういいって。　ここに集めてくれ。お礼の朝飯、用意しとくから…」

病院への帰り道
看護士サン達はしつこくあたしにあの男の子…クロウ君のことを聞いてきた。
「あさなちゃん、　何かあったの？　あの男の子と…」
「…ぅぅん…あそこで会っただけです。でもすごく不思議な人だった。どこからか突然出てきたの。」

「ふーん…？」

「よ！　遊びに来たぜ～」
「クロウ君。本当に来てくれたんだ！うれしい！」

昼過ぎ、買い物袋一杯にゼリーとスナック菓子をもって、あさなの病室に入った。

「今日、土曜日だし友達とかお見舞い来てくれるんだろ？いっぱい買ってきたよ」
「……ごめんなさい…私、友達いない…」
「へ？！」

あさなはうつむいたまま話し出した。

「小さい頃から通院していて、小学校へ入る直前に入院したの…入学式も、卒業式も出てなくて…中学は入学式だけ。」
「じゃぁ　本当に一人も……」
「うん……けど、仕方ないモン。お父さんもお母さんも病気がちな人で、お母さんは私を生んですぐに死んじゃったんだって。それで、新しいお母さんと再婚して…けど、その後すぐお父さんも死んじゃったの。　本当の子じゃない子供を一人で育てられるほど心の広い人なんかそうそういないよ…」
「・・・・・」

俺は黙って聞いていた。
なにか、寂しさとは別の　悲しい気持ちがあさなを取り巻いているのがわかった。

「よーし！わかった！！」
「・・・ぇ？」
「俺が最初の友達だ！　いいだろ？な！」
「・・うん・・・・・！！」

瞳に目一杯涙を浮かべて笑った顔が　俺の身体を縛り付けた

人間なんか　嫌いなはずなのに

どうしてこんなに　心配しているんだろう・・・・

4、混乱

オレは毎日、あさなの病室へ飛ん・・・もとい、足を運んだ。
もちろん怪しまれないように人間の少年の生活スタイルに合わせて。
あさなに名乗ったときに、周りに看護士たちがいたもんで、名前を知られてしまったから仕方ない。
俺たち悪魔は、名乗りさえしなければ普通の人間から姿を認識されにくくなる。
ま、認識「されにくく」なるだけだから、霊感のある人間とかには見えるらしいけど。

そんなわけで、病院の中では普通の人間の男の子のふりをしていなけりゃいけない。
面倒だけどしかたない。
とっさだったからなー…

んで、そのあさななんだけど…

ゲーム器を持ちこんで看護師のおばサンにこっぴどく怒られたことがあったが
そのときあさなはとてもよく笑っていた。

すごく…なんて言ったら良いんだか…
腹の上のほうがちくちくして、鼓動が激しくて…
なんか、オレ…変だ。

しかし、何かが引っかかる。
カルテを見ただけのときは何も感じなかったはずなのに
オレは
あさなを以前から知っている……？

数日後、またあさなの病室へ行こうとしたとき。
人間の姿のまま、炎天下の歩道をだらだら歩いていたら…
ものすごい勢いで何かが背中に突進してきた。

「痛った！？」

〜おい、クロウ！〜
〜あれっ、先輩！？〜

久々に姿を見せたガル・ベルゼバロだ。
今はハエの姿だったから、ぶつかってこなかったら見落とすところだった。

また何かイヤミでも言われるのか、と身構えたところ…

〜あの少女のところへ行く前に　窓から少し、みてみろ。〜

〜え？〜
〜どうやら聖魔神様でさえ予測することのできなかった事態になっているらしい…　詳しいことは分からん、充分注意するよう、とのことだ。〜
〜はぁ……〜

どうやら本当に深刻な状態らしく、大慌てでほかの仲魔のところへ飛んでいった。

聖魔神様は、魔界を護っていらっしゃるんだ。
神を嫌うとか、世界に混沌をもたらすとか…そういうわけでなく唯々そうなっているだけ。
悪者、と決め付けないでほしいんだけどよ。

で、その　神の一部である聖魔神様でも認識できなかった事件…
一体何があったんだろう…？

〜何だって言うんだ？〜

オレはこっそり烏の姿になってあさなの病室に一番近いところの木の枝に停まって中を覗き込んだ。

ッガシャーン！！！

｛！？？｝

窓の近くに置いてあった花瓶が無い。それが割れたのか・・？

（あんたなんか、早く死んでしまいなさい！いつまでもだらだら生きて、恥ずかしくないの？！

医者なんか『だんだん元気になってきていますよ』ですって！！

冗談じゃないわ！）

（お、お義母さ……）

（黙れ！！）

バシッ！

（いいね、今週中にでもさっさと死ぬんだよ！　全く…こんなんじゃいつまでたっても再婚できないじゃない…）

女は、大声で怒鳴り散らしていた。

ドアを蹴破るような音がして、ようやく出ていったのがわかった。

女の顔がものすごく怖かった…

あさなの母さん…？　じゃぁ、なんで……？？

オレは何食わぬ顔で病室へ入った。

「あーさなッ　遊びに来たぜ。」
「・・・・クロウ・・君・・・・・・・・」
「うわ！！　どうしたんだよこれ！？　びしょ濡れじゃないか！何があったんだ！」
「大丈夫・・・何でも無いから・・・」
「ばっかやろ・・・じゃ、何でデコに怪我してんだよ！　花瓶割れてんじゃんか！
　何かあったんだろ？ちゃんと言えよ！！」
「いいの・・・その、お花の水、取り替えようとして・・手が滑って・・・・違うの・・大丈夫だから・・・・」

「じゃぁ、何で　泣いてんだ！！　何が違うんだよ！オレ、何も言ってないぞ？」
「違うの・・・水が・・・・・」

オレもあさなもそれ以上何も言わなかった・・・
あさなのしゃくりあげる声だけが聞こえる
泣かせてしまった・・・・・・
「・・・看護士さん、呼んで来る……」

オレは、あさなが着替えている間、廊下の窓によしかかっていた。

どうして子を守るはずの親が子を傷つけるんだ？
あさなの顔は水浸しだったけれど、あいつは明らかに泣いていた。
どうして・・・正直に話してくれないんだ・・・・・
まだ信用が足りないのか・・？

オレはどうすればいい・・・・ん？

〜クロウ！　ォィ、聞こえてないのさーっ！！〜
「・・・・！？」

窓の、ガラスをはさんで反対側に一羽の雀（すずめ）が羽ばたいている。
〜お前・・ペモリン？〜

窓を開けてやった。普通の雀よりも羽根が大きい。
同期の悪魔、七大悪魔『ペイモン』の子孫、「ペモリン」だ。
さっきからずっと呼びかけていたらしい。

〜はー・・ようやく気が付いたわね！　にぶいんだからさー！〜
〜悪かったな！　で、何のようだ？〜
〜いやさー、アタイもここで仕事だったんだけど、その子供がさー・

・・

両親の虐待で今朝、死んでいたって・・・　人間の生命予定表よりも三日も早くにだよ？

つまり『天使』に横取りされちゃったんだ。〜

〜そ・・そんな・・・・！　天使は人間が死ぬ時まで人間の命には手を出さないんじゃなかったのか？　どうして！？〜

〜他の連中にもそういうのいるみたいだよ・・　解っているのは天使が仲間を集めようとしていることくらいだね。〜

〜仲間・・・だと？〜

〜兎に角、よくわかんないんだよ。注意を怠らないようにね！　んじゃっ〜

ペモリンは勢いよく飛び立って行った。

廊下に散った羽根を外へ捨てている間に看護士があさなの濡れたパジャマとシーツを持って出てきた。

「もう入ってもいいわよ」

「ぁ・・はい。」

「あさな・・・」

額と頬に絆創膏が貼られている。

「ごっゴメンね　びっくりさせちゃって・・・・・・・へへ・・」

あさなは精一杯笑おうとしている。
・・自分が隠し事をしているから　あさなも隠すのか・・？

・・・・・・・だったら・・・・・・・・・・・・・・

「お前、嘘つきだな。」
「・・ぇ・・・？」
「オレ、全部みてたんだぞ。　母さんに花瓶で殴られたんだろ？」
「！！　　　な　何言ってるの？　そんなこと・・・」

動揺している

「『死ね』って・・言われてたろ・・・・？」
「・・・・そ・・んな・・・・・」

顔が青い　両腕を握り締めている

「なん・・で・・・・そんなこと・・・」

深く息を吸った　　規則を破る覚悟は、決めた

「おれは　悪魔だ。　　お前の魂を回収するために　此処に来た。
勝手に死なれたら困るんだ。」

5、悪魔

あさなにオレが悪魔であることを告げたが
彼女の反応は少し意外だった。

少しは驚いたようだったが　それ以上に楽しんでいるように見えるのは
気のせいなのか…？

「・・・・それで、子供に石を投げつけられて左眼にこんな大きな傷になって残ってるんだ。　今もあんまりはっきり見えないんだ。
あっさり死んじまったからそこから先は覚えてないな。」
「酷いね…その恨みで悪魔になったの？」
「まぁ、そういうことだよな。　…てかさ、少しは怖がれよ！」
「だって、すごいもん！　悪魔と友達なんて…！！」
「はぁ・・・　（悪魔の威厳って　こんなモンなのか？）」

あさなが話してくれた事情はこういうことだった・・・・・・・・
あさなの小さいころに死んだ本当の父親の新しい妻には
旦那が死ぬ寸前から付き合いだした男がいるらしい。
無茶苦茶な理由をつけてあさなを学校へ行けなくしたのはこの男だ。
肺が悪いのは事実だが、入院する必要はなかった。

通院だけで十分だったのに　反論する隙もなく　病院へ押し込まれた。
そして、義理の母は再婚しようとしているが、男があさなを極度に嫌っていて
『死んだら結婚する』と、約束している・・・・

「じょ、冗談じゃねぇぞ！！！　なんだって子供の死を願う親が居るんだよっ！？
　人間くらいじゃないか、同族を喰うわけでもなく殺す生き物は…信じられねぇ……」
「クロウ君、義母さんのこと悪く言わないで…私のせいなんだ…
　私がまだ生きてるから……仕方ないの……」

「・・・・ふん、じゃぁ、お前も早く死んでしまいたいわけだ。」

「！　ちがっ　・・そんなこと言ってない！！」
「天使の神は『他人の為に命を省みない』行為が偉いみたいに言ってるけど
　そのとおりにしたいわけだ。　やっぱ、お前みたいなのの魂は天使がほしがるわけだ。　もう、いい。じゃぁな！！」
「・・・・・・！」
　　ばたんっ！！

オレは、言いたいことを全部言い切ってしまった……
言ってしまってから、外へ出て頭が冷えてから

ようやくあいつをズタズタに傷つけたことに気がついた。
八つ当たりなんかして……！
引き返そうとしたが、足が動かない。
そして、　　病院の玄関とは逆方向に走り出していた……

「ど・・・どうしてクロウ君がそんなこと、言うのよ！！
私の気持ちなんか　わかんないくせに・・・・！」
必死で言い返した。
けれど、半分も言い終わらないうちにクロウ君は部屋から出て行ってしまった。
ドアの閉め方も酷かった。
「・・・何よ・・・・『自分は悪魔だ』ーなんて、格好つけちゃって…
　悪魔なんか居るわけないじゃない…　あのときだって、きっと廊下で覗いていたんだ…
　……クロウ君のバカっ…　意地悪！」
洗面台で乱暴に顔を洗って着替え

キャップ帽を被って病院の非常階段から外へ抜け出した。

運良く看護士さんたちには見つからなかった。

「もう…嫌……」

私は足が動くままに歩き出した……

6、葛藤

「……、……　……」

なんか、話し声っていうより悲鳴に近い。
いやな気配もする。

「…っへ！」

いらいらしてた俺は、何の躊躇もなくそっちへ向かって歩いていく。

「ちが、違う！家族には手出ししないと…！」
「契約上、そんなものは書かれてないねぇえええ？」
「ほらよく見なよ、奥さんとお嬢さんが怖い目にあっちゃうよ？」
「やめろおおおおお！」
「このボタン、押したら終わりだねぇええ？」

「ほい。」

がちゃん！

「「「は？！」」」

「ひぃ！？」

「うるせーぞ、あんたらよ。表通りあるいてて聞こえてたぞ。ふつーの人間さんにもばれちゃうだろーが。」

「何しさらすんじゃ小僧！？」

「殺されたいんか！」

刃物を出すヤクザ。

その刃先にぷすっと指を当てる。

指先から血がにじむ。

「悪いけど、そーゆーの効かないから。」

ぎり。

ぐしゃ。

めきめき…

「…ぎゃぁぁぁっぁぁぁぁぁああああああああ！！！！！？？？？」

刃物が金属の板状に延びていき、木製の柄が木の幹が成長していくように膨らんでいく。

ヤクザの手を巻き込んで。

「何だこのガキ！！？」

「何をしやがった！」

「ちょっとだけ元に戻してるだけだ。」

「はっぁぁぁ？！」

「…よく考えたら、あんたたちってヤクザなんだから…殺したところで大事にゃならねぇよな。」

「や、やめろ！こいつがどうなってもいいのか！？」

「ひぃぃ！！」

家族を盾に、脅されていた男。

意味のない人質。

「べつに。」
「おま、お前悪魔かよ！！」
人でなし！　の意味なのだろうが。

「おう、悪魔だ。　ノインナチュラル（自然法則否定型悪魔属）所属のルーキーだ。」
「…は？」
「悪いけど、今スッゴクむかついてるんだ。八つ当たり、かんべんな。」
にこー。　っと笑って見せた。

ずぶぅ！
ばぎゅ！
びぢゅぅぅ！

「ひ……ひぃ…」

「大丈夫かおじさん。」

血みどろの手で男を引っ張って立たせる。

「こ、ころ…」

「殺さねーよ。　俺は、相手が気に食わない場合だけだ。おじさんには何の関心もない。助けたつもりもない。誰かに口外した場合は気に食わなくなるかもしれないな。」

「…ひぃぃぃぃ……！」

必死に逃げてったな。
まぁ、あれが普通だ。

あいつ、やっぱり変だ。

いらいらする。

公園で手を洗いながら、いらいらする腹の中を押さえようとしてた。
とにかくぎりぎりするこの痛いものをどうにかしたくて、とりあえ

ず…

寝床（まぁつまりいつもの神社）へ戻ることにした。

7、命懸

「鶉野さーん！」
「あさなちゃんー？」

夕暮れ時・・・・神社の境内
看護士達が必死であさなを探しているにもかかわらず、あさなは姿を見せなかった。

「どうだった？」
「ダメ・・・絶対神社に居ると思ったのに・・・・・そっち側は？」
「もぬけの殻。」
「う～ん・・・あと、あの子の行きそうな場所は・・・？」
しぶしぶと出て行く看護士。

「…はー、はぁっ　はっはぁっ　　っぐ…かは……」
誰も居なくなった境内に　　小さな荒い息声が聞こえる…

あさなは社の裏側、崖の下に落ちてしまっていた。

誰かが来たことに気がついてあわてて社の裏へ隠れたまではいいが、
地面が崩れて……
気がつかれなかったことが、裏目に出た。

「クロ……く…」

『呼んだか？』

ガササ・・　スタッ！

「！？」

オレは大げさに木の上から飛び降りた。
それがあさなに対してかえって好都合だったようだ。
「……？」

涙目で見上げるあさなを抱きおこす。

「無理スンな。ほら、眼　閉じて…ゆっくり呼吸して……」

あさなの肩を支えて、オレの身体によしかからせた。
鼓動がやけに速い。
オレのもあさなのも…

あさなはぐったいして動かない。
オレは音を立てないよう慎重に翼を伸ばし、数枚羽根を引き抜いた。
あさなの首の後ろに押し当てると、すぐに呼吸は平常に戻った。

「ん・・・？」
「よし、もう大丈夫だな。」

手首を返して羽根を隠して　あさなを抱きかかえた。

「きゃっ？」
「病院、帰るよ。」
「やっ……　ヤダ！！帰んない！クロウ君も嫌い！　離して…っ」

「嫌いでいい。」
「…ぇ？」

「好きになっちゃいけないんだ…だから、それでいい。嫌われたほうがやりやすいから…　けど、傷つけたことは謝らせてくれ。
ゴメン……」
「……」

あさなは黙って、何も言わなくなった。

オレは強引にあさなを崖の上に運んで、地面に降ろした。

「ちゃんと、病院に帰るまで、ついてくからな。病院に居てもらわないと困る。　こんなところで予定外な死に方されたら、魂の回収が出来ない。」

ゆっくりと歩き出した。
オレの方に向かって。

「え…？」

「……ごめん、嫌いなんていって……　私のこと、探してくれてたのに…」
「……」

抱きしめた。
止まれない。
抑えきれない。

オレは　　悪魔
あさなは　　人間
どうしようもないキモチだけが左眼と頬を濡らした。

「天使って　死んだ人間や動物の魂を天界へ運んで、裁きを受けさせるのでしょう？じゃぁ、悪魔は　魂をどうするの？」

帰り道、あさながオレの横を歩きながら聞いてきた。

「ん…昔は神が人間に与えた『力』を回収して、仲間を増やすことが目的だったらしい。動植物の魂はほとんどが天界へ昇ってまた新しい動植物になるけど、ごくたまにオレみたいに自ら魔界へ堕ちていくのもいる。　最近じゃそういう風に自分の意思で魔界へくるのが増えちゃって、『住魔処理』が大変らしくてね。その対策として『再製魂』が行われてる。　回収した魂から『命の欠片』をちょっと取り出して、それを『喰う』ことで、新しい『命』になる。　勿論、悪魔としての記憶は完全に消去される。　どれだけ『命の欠片』が必要なのかとか、どの動植物になるのかもわからない。人間になれないことは、わかってるみたいだけど…　人間ってのは自然界から隔離されているし、神の息を鼻に吹き込まれているせいもあって　かなり特殊な生き物になってるんだ。　だから天使になれる人間なんて幼い子どもとか、赤ん坊だ。そのくらい限られているし、逆に悪魔になった人間ってのも聞いたことないな。　普通、人間は人間のままだ。新しい母親の胎内に転送されるんだよ。」

「悪魔や天使は生命体じゃないの？」

「違う。命を授かったのは人間と動植物だけ。その中でも人間は神が特に気にかけている。　人間は自然界で生きていくことが出来ず

にそれだけで独立した生活環境を作っているだろ？　≪自然と共存する…≫なんとかっていってるのもあるけど、ムダムダ。人間がそう思いこんでるだけ。　　これらは全て神と聖魔神様がお定めになられたことだ。それと同じで神と聖魔神様がわれわれ悪魔と天使も隔離した存在とされたんだ。　　天使は神が聖力を分け与えて、白い翼を持つことの許されたものを指す。　さっきも言ったが　基本的に　幼くして死んだ人間や動植物だな。　　逆に悪魔は死んだ動植物の魂に残る強い負の意思を聖魔神様が増幅し、魔力を与えられ、生前の姿とは違った姿を持つものを指す。　　共通するのはどっちも時間の経過に肉体が影響されない。つまり、『成長や老化』が無いことだ。　自分の意志で自在に変えられるんだ。人間や動植物には　そんなこと出来ないだろ？　その違いが『いのち』の有る無しの差だ。」

「…じゃぁ　悪魔は命になれるのに、天使はなれないの？」
「無理だな。命の最低条件『負』のエネルギー、それが天使はゼロ。どんな生物も、正と負を持っているからこそ命。１００％聖気の塊である天使は二度と生命にはなれない。　まれに、最大級上位天使『ルシフェール』もとい『サタン』様のように天使から悪魔へと堕落した場合があるけれど、彼らはいくら頑張っても、魔界で上級になれても、命にはなれない。」

一通り、質問に答えて、もうすぐ病院に着く手前頃まで来た。

「…そうなんだ……」
「でも、なんで急に？　全然オレの言ったこと信用してなかったのに…」

「んー？　信用してみよっかなって　思った、それだけ。じゃぁね！」

「あっ……」

「明日も来てねー！！」

あさなは大きく手を振って走っていった。　オレも振り返した。

「…これでよかった、のかな……」

あさなの背中が見えなくなったころ、オレはあさなを抱きしめた事を深く後悔していた。

気持ちを抑えきれなくなっている。

やっぱり、悪魔は人間に対して傷を負わせることしか出来ない存在なんだ……

腹の奥が痛い。

…違う

胸が　痛い。

8、赤布（前書き）

お久しぶりの更新です。
またよろしくお願いします。

8、赤布

次の日、オレは普段どおり、できる限り普通に病院に向かった。
あさなの様子が心配だったが、元気そうだ。
話を聞くと、病院の皆はドロだらけの彼女を見て怒るよりも心配して慌てていて、ばたばたしているうちに済んでしまったらしい。

「・・・・でね、今日は皆、何事もなかったかのようなの。変だよね・・・・」
「ぅ、うん・・・・」

あさなには言わなかったが・・・
ベルゼの先輩が事を済ませてくれていたのだ。
とりあえず感謝しなければ、な。

「ぇーと・・・・兎に角、下手にこの事には触れないほうがいいよ。な？」
「・・・・そうだよね。」
「あーと・・えーと・・・・・ぁの、ゼリー喰う？ほら、こないだのまだ冷蔵庫に残ってた。」
「うん。」

自分でもわかるくらい動揺している・・・・ダメだな、こりゃ・・・・
心の中で泣きながら、棚のスプーンを探そうとしゃがんだのとほぼ同時

嫌な気配がした。

窓から見てたときに感じた殺気と同じ、吐き気がしそうなほどの憎悪。

「・・・・！？」

思わず立ち上がった。

「どうしたの？クロウく・・・・」

ガラッ！

「ぉ・・・お義母さん・・・・」

「・・・・・」

やはり、あのときの女だった。

ケバケバしい粧と、人間の作った、変な匂いのする水。

この女から漂うのは本当に気分の悪い臭いだ。

「あら、なあに？貴方は・・・・」

他人の前なのに母親を演じる気すら無いのか、傍らに居る男の腕を

しっかりと組んでいる。
男はオレを嫌な目つきでじっと睨んでいる。
「（クロウ君！　逃げたほうがいいよ、早く・・・！！）」
ドゴッ！
「・・・ぁぐっ！」
「きゃぁああ！！」
蹴り飛ばされて、反対側の棚…花瓶が在ったところ、今は何も置いていないそこにぶち当たった。
「ふん、どうもガキの様子が変だと思ってたらお前が原因か。それには死んでもらわなきゃならないんだ。ここに二度と近づくな。ほうっておけば・・・・・・」
何かが千切れる音がした・・・
「・・・っざけんじゃねぇえええ！！！！！！」
何をしたのかは覚えていない。
何かが壊れたような音で　目が醒めた。

壁に男がめり込み掛けている。

「…がぁぁあ……！！？」

「しまった…！」

気が付かないうちに力を放出してしまったらしい。

オレは慌てて自分の右腕に噛み付いた。

その血を壁に塗りつけると、壁は男を吐き出して元どおり平らになった。

「なっ・・なんだよコイツ！」

「逃げるわよ、早く！」

壁の血痕が消えたのを確認してほんの少し貧血気味になった身体を座らせる。

悪魔の血は飛び散ったりしたくらいならすぐに気化する。

壁にはしみになった程度しか残ってない

「・・・くろぅ・・くん・・・・・？」

「！　あさな・・・・・」

シーツに包まったあさながこわごわと頭を出した。

相当怖かったのだろう、がたがた震えている。

「大丈夫だよ、もう居なくなった。」

「あ・・ありがと・・・って、そうじゃなくてっ　血が・・！」

多分、男にやられたのだと思ったはずだ。
顔が曇ったまま・・・

「このくらい平気だよ。なめてりゃ治る。」
「ダメだよ、ばい菌が入ったらどうするの！」

あさなは力いっぱいオレを引っ張って椅子に座らせ、ベッドの下から小さな箱を取りだし、薬や包帯の準備をしだした。
テキパキと手当てをする様子、ずいぶん手馴れている。
その練習台が『あさな自身』だということは想像できる。
あえて何も言わない事にした。

「はい、おわり。」
「・・ありがと・・・」

人間用の薬が効くとは思えないが・・・まぁいいか・・・

「しばらくさわっちゃだめよ。」
「あぁ・・」

少しの間、気まずい沈黙。

「・・・ゴメンね、クロウ君・・・・」
「なんで謝るんだよ。　あぁ、ほら、泣くなって・・・」
「ん・・・」

オレはあさなにハンカチを渡した。
受け取ったあさなは　なぜか固まった。

「・・・あさな？」

「これ・・・・このハンカチ、私が無くしたのと同じ・・・・」

「え？」

赤い、あまり趣味のいいとは言えないような無地のハンカチ。
自分でもいつから持っていたか、とかは全然覚えていない。
しかも、何処にでもありそうなモノだが・・

「・・・・なんなら、あげるけど・・・」

「えっあ・・」

「・・オレ、帰るな。」

「ぁ、うん　バイバイ・・・」

「そうだ・・・・たしか・・・あのハンカチって、悪魔になった日
に腕に巻きついてたんだっけ・・・　でも、何でだ・・・・・・？」

9、記憶

「んん～・・・」
その夜・・・
オレはいつも通り神社の木の上で寝転がった。
けれど、いつもはすぐに眠れたのになかなか寝付けない。
ヒトの姿のまま地面におりた。
フォボとディモがそんなオレを心配してか付いてきた。
「大丈夫だよ。　ちょっと散歩してくるだけだ。」
月が一番きれいな時間だ。

少し・・昔の事を思い出していた。
・・・・たしか、巣立ちしてすぐの頃だ・・・・・

――――

久しぶりの里帰り…

人間が神社の境内へやって来た。
その時からなんとなく嫌な予感がしていた。

「おい、みろよ！カラス捕まえたー！」
「げーっヤメロよ気持ち悪りぃ。」
「ぁ、コレで改造銃の練習しようぜ？」
「おっいいじゃん。やろうやろう。」

黒い人間は、なにか知らないが黒い棒を振り回したり木を蹴ったりしながら五月蠅く騒いでいた。
よく見ると、捕まっている烏はオレの兄弟達だった。
片足をロープでつながれて、その片方は神木にくくられた。

ガガガガガガッ！　バンバン！！

聞きなれない不気味な音・・・
必死で逃げる兄貴、ぶら下がる弟や妹・・・

敵わない。　わかっていてオレは人間達の前へ突っ込んだ。

「ぅわあ！？」

ガツン！

顔面に体当たりしたはずだった。
目をえぐってやろうと思ったけれど、見えない何かにはじかれて、地面に転がった。

「こ・・・こんのやろぉ！！」

ドスッ……！

何が起こっているのかわからない。
自分の体が痛いのか熱いのか・・・そんなこともわからない。
目が片方見えないことに気が付いた。
顔になにか突き刺さっているらしい。動く事さえ出来ない。

どのくらい経ったのか・・・
まだ生きているのか、もう死んでいるのかも、いまだによくわからない。

そんなところへまた人間が現れた。

だが、そいつは皆をオレの近くへ置いた。
足からロープを外している。
そして、皆を布で一羽ずつくるんで地面に埋めた。
オレは赤い布だった。

「この間は犬と猫、昨日はウサギ、今度はカラスか・・酷いものね・・・・・・」

――

ここまでが、普通の烏だった頃のオレの最期の記憶。
こんなにはっきり思い出したのは久しぶりだ・・・

そして、気が付いた。

「そうか・・・あのハンカチ、あさなのなんだよ。オレのじゃねーんだ。」

オレたちを、埋めてくれたのが　あさな　だったんだ。

１０、前夜　…？黒札

あさなを守るように吹いて来る風が、日を追うごとに弱くなっていく。
いつからかだったか・・・オレは朝早くから夕方の面会時間ギリギリまであさなの側にいるようになった。（勿論、昼時には出て行くが・・・）

「学校、行かなくていいの？」
「ヘーキヘーキ。オレの事なんか気にすんなって。」
「・・・うん。」

本当は・・こんな何でもない会話をずっとしていたかった。
けど、風は勢力を弱めていく。
今までなら、さっさと風なんかやんでしまえ。
そう思っていたのに。
こんな感情は今までなかった。

違反行為ばかりして。
ベルゼ先輩、結局最後まで迷惑かけることになります。スンマセン。

オレは、最大の禁忌を犯すことを決めたんだから。
後悔なんかしてられないんだけど。

――――そして・・・

「いよいよ、明日だな。」
「はい・・・・・」

深夜。
オレとガル＝ベルゼバロ先輩で病院の屋上にいた。
先輩は事を詳しく教えてくれた。
――天使達が本格的に悪魔狩りを始める。
その戦力補充として、神の守護が強く残る「子供」の魂を回収し、
『戦天使』を育てることにした。

しかし、人間はなかなか子供のうちに死ぬことが少ない。
苦肉の策として・・・・・比較的、死期の早くおとずれる、すなわち寿命の短い子供を『わざと』事故死させたり暴行による死、そして運命表の改ざんを行ってきたのだ。――

「全く・・・・天使も大したものよ。悪魔憎さに人間を殺す、か。
ふふ・・・・」

皮肉たっぷりの笑顔。
恐ろしいほどだが、あえて言う。その顔は美。
笑った顔など滅多に見れない。そういう意味では貴重な表情だ。

「・・・・あさなも・・・・やっぱり・・・・・・・・」

「いや、彼女は定刻どおりのようだ。これは最新の運命表だ。天使による改ざんも見られない。」
「・・そうですか・・・・・・・・」
それでも不安だった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・不安？　何処からそんな台詞が・・・

「これをもっていけ。」
「？」

受け取ったのは、黒い呪札。

「彼女の側においておけ。役に立つはずだ。それと・・・・一番大切なのは、不安にさせないことだ。　・・・必ず勝て。　今度の戦闘は今までとは比べる事さえ出来ないだろう。」
「！　まさか・・」
「彼女は天使となれば、間違いなく大天使クラスになるぞ。下手に敵を作るわけにもイカンだろう？」
「・・・そういう意味か・・・・（滝汗；）」
「どうした？」
「何でも・・ナイデス。」

「あ、そうだ。先輩、ちょっと頼みがあるんですけど聞いてもらえますか・・・？」
「内容によるがな。」
「あの・・・・」

オレはちょっと思いついたことを耳打ちした。

「・・・・ふん。気休めにもなるかどうかだな。だが、お前にしてよく考え付いたなと、ほめてやるよ。」
「けど、あさなの母さんは死んじゃってるから・・呼ぶのは霊体スね。怖がらないかな・・・」
「霊体・・なぜだ？　母は生きているじゃないか。」
「ええ！！？」

あわててポケットからカルテを引っ張り出す。
たしか、家族構成なんかもけっこう詳しく載っているらしい。
（今まで一度もそこまで読んだ事がなかった・・・）
だいぶくしゃくしゃになっているが、文字は読める。

「え～と・・・本当だ。あさなが生まれてすぐに、離婚したんだ・・・あさなを父方に残して。」
「問題ないだろう？」
「はい。」
「よし、行くぞ。　言っておくが、力を貸してやるだけだ。返せよ。」
「・・・・・・・・は・・・い。」

オレ達は、夜闇へ飛び立った。

１０、前夜…？母娘

クロウ君が帰ってしまい、一人きりになった病室。

私はずっと泣いていた。
なぜかわからないけれど、ものすごく寂しかった。
なんだか、もう会えなくなるかのような・・そんな気さえした。

「お母・・・さん・・・・」
顔も知らない母親。
一度でいいから本当の母に抱きしめてほしかった。
記憶に残せるときに。

私は義母の『しつけ』を守った。
嫌われたくなくて。
どれだけの男に身体を触られたかもう、わからない。

「やっ　やだ！　お義母さん！！」
「さ、好きにやって頂戴。触るのは千円、イれるのは一万。生は二万ね。」
「いやぁあああ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
体中が震える。
誰かに触られていない場所を探す事のほうが難しいくらい。
全身。
一週間に一回は必ず血を流した。
赤ちゃんができなかったことが唯一の奇跡。

クロウ君に出会ってから、ようやく優しさを感じた。
義母にお金を払ったのだろう、知らない男が来ても、クロウ君が居るだけで慌てて逃げ帰った。
すごく助けられた。
でも、満たされなかった。
本当のお母さんに会いたい。

「・・・ぅっ・・・・・く・・・・・・・」
また泣き出したとき　　何かが肩を触った。

びっくりして顔を上げると　知らない女の人が椅子に座っていた。
少しふっくらした顔と体
　やさしそうな人・・・

「だ・・・れ・・・・・？」

女の人は、私の肩を引き寄せるときつく抱きしめてくれた。
そして、音もなく消えてしまった・・・
「・・・・・！？」

もしかして

「お・・・お母さん・・・・・・・？」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――

（「うまくいったかな・・・」）
あさなの病室が見える木の上。

オレと先輩、そして　　女の人がいる。

「どうもすいませんでした、こんな時間に・・・全然知らない者なのに付いてきてくれて、感謝してます。」
「お礼を言うのはこっちです。会えてよかった。もう二度と、会えないと思ってましたから・・・・」
「それじゃ、東京へ送りますので　またこれを・・・」
「ええ。」

アイマスクを渡す。

「先輩お願いします。」
「それじゃ、行きますよ。『鶉野　さおり』さん。」
「はい。　ありがとう、あの子と友達になってくれて・・・」
「こちらこそありがとうございます。どうぞ気をつけて・・・」
「ふふ、超能力って便利ねぇ。それじゃ、さようなら。」
「ありがとうございました！」

超能力者　（ってことにしてつれてきた）ベルゼの先輩は、女性をつれて、転移の呪文で東京へ移動する。

彼女があさなのお母さんだ。血のつながった本当の母娘。

１４年前・・・
あさなにとっての両家の祖父母が、二人の結婚をめちゃくちゃにしてしまう大事件を起こしたのだ。
すでに子供（あさな）のできていた母親は、無事産むまでは別れたくないとがんばっていたが
結局、離婚せざるを得なくなってしまった。
しかも裁判の結果、あさなは父親に引き取られる事に・・・

いくつものマイナス因子が重なり合ってしまった、最悪のケース。
そして、理由もよくわからないまま・・・あさなに母親は死亡した、と告げることになったのだ。

「人間って、めんどくさい生き物だな。」

１０、前夜…？母娘（後書き）

一年くらい前なのですが！
烏の羽根のイラストをいただいておりました！
ｂａｒｏｑｕｅさんからの頂き物です。

カラスの悪魔クロウ君と人間のあさなちゃんです。

ｈｔｔｐ：／／３４０３．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３２６５０／
みてみん様のページへこぴぺでＧＯしてくださいませ！！！！！

本当にとんでもない美麗イラストをいただいちゃいまして、身震いがとまりませんでした。
許可をいただいてきましたので、代理ＵＰします。
ありがとうございます、姉さま！！！
遅くなりましてもうしわけありませんでした！！

愛してます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4523s/

烏の羽根

2011年10月31日21時18分発行